

1期生会

◆竹井 溥

1、感動のホームカミングデー

第一回の「ホームカミングデー」の行事が3月19日第44期生の卒業式の日に行われた。此の行事は松本学校長の御発案によるもので、卒業式にOBを招き伝統の偉大さをお互いに認識しあい、その絆をしっかりと受け継いで行くという趣旨から始められた制度であり、その一回目として私共1期生が招待された。

この日は我々にとっても一生一度の晴れ舞台というわけで、北は北海道から南は沖縄まで約半数にあたる百五十三名の同期生が集い、更に石山晃君、平山救馬君、湯浅彊君の三未亡人も特別参加され、同伴のご夫人方を入れると、実に二百五十五名が参集するという大盛況となった。

先ずは控室で、久し振りの再会に各所で歓声が上がった。中には卒業以来の人、名前が思い出せない人などもおり、43年の時の流れを感じた。

午前十時から場所を総合体育館に移

し、第44期生の卒業式に臨んだ。本科三百八十九名、研究科八十五名に対する卒業証書、学位授与の後、松本学校長、故小淵首相、瓦防衛庁長官、来賓の上坂冬子氏の祝辞があり、最後は卒業式の名物で、我々も是非やってみたかった卒業生の帽子投げで終了した。

次いで陸海空の制服に着替えた卒業生の宣誓式と観閲式に列席した。各幕僚長への宣誓は自衛官として生きる決意の誓詞であり、思わず身が引き締まった昔を思い出す。曇天の中、陸海空のOBパイロットによる各種航空機の祝賀飛行があり、在校生の観閲行進が始まった。儀礼刀は紺の制服によくマッチし、防大生でしか味わえない凛々しさを感じ、又女性小隊長の甲高い号令が新鮮だった。

午後二時から学生会館で、我々だけの懇親会食が開かれた。準備された食事は余り褒められたものではなかったが、我々の再会の熱気がそれを補って余りあった。久里浜の仮校舎から始まり、小原台までの四年間の防大生活が、走馬燈のように頭の中を巡る。傍らでは若かりし頃、同じ官舎で過ごされたであろうご主人方の話も弾んでいる。長いようで実は

アツという間に過ぎ去ってしまった現役時代、しかしその中で、各人それぞれの歴史を刻んで来たが、その原点がここ小原台にあった。けれどもそれを語り尽くすには、時は余りにも短すぎた。途中、松本学校長も見えられ、本会の趣旨を説明され、岡田一期生会長が答礼した。その後、一年の時の小隊編成で各々記念撮影をし、開校50周年記念日での再会を約して散会となった。

外に出ると、卒業生を送り出す人垣が校門に向けて長く延びていた。43年前我々が巣立った時、小原台特有の一陣の猛砂塵がまき起こり、「風と共に去りぬ」と言われたことを思い出す。昔と違い各クラブの大きな旒旗が林立し、太鼓を鳴らしての派手な演出を横目で見ながら、足は自然と浦賀に向かった。昔はまさしく「けもの道」で雨が降ると草にしがみつきながら登ったものだが、今では階段には手すりがつき、道路は舗装され、麓は家々が軒を接し、標高が変わらない以外は往時を偲ばせるものは何もなかった。

小原台上は開校50周年に向け、現在建築ラッシュで、本館、人文館は取り払わ

れ、新築工事に着工中、一足先に完成した給水塔兼時計台が、新しい歴史を刻みつつある。母校の発展する姿を頼もしく思い、興奮の一日の心地よい疲れを感じながら帰途についた。

2、将来のために

このホームカミングデーの行事は来年は2期生、再来年は3期生と受け継がれて行くという。我々はいわばそのテストケースと違ってよいであろう。将来よりよき伝統行事として残していくために、少しばかり所見を述べたい。先ず招待者としてのOBの年齢が偶然にも65才前後であったことは、真に当を得ていた。65才といえ、ほぼ第二の仕事も終わり、人生の折り合いもつき、お互いに利害関係もなくなり、丁度防大卒業時に似た横一線の心境になり得ること。そして体力、気力ともに、まだ十分余力を持っている時期であること等から、年齢的に非常に適切であったと思う。又イベントとして卒業式を選ばれたことも最良の選択で、この行事の趣旨からして、これ以外に考えられないであろう。ただ折角列席しているのであるから、OBと卒業生との間

で、何らかの形で触れ合いが欲しい。例えばOBから“はなむけ”の言葉を送るとか、記念品を渡すとか、又は代表者が握手を交わすだけでもよいと思う。今後一連の卒業式行事の中で、考慮していただければ有り難い。

最後に懇親会食について申し上げたい。会食を我々だけの会として実施していただいたことは、正解であったと思う。もし卒業生の会食会に参加していたら、大混雑の中で満足に会話を交わす間もなく、あわただしいうちに終わってしまったであろう。それは別として、問題は懇親会食の中身である。先ず缶ビールや缶ジュースで乾杯をした。又お料理も、一生に一度しかないパーティのものとしては、かなり簡素な内容であった。

もう少し盛大な宴席に出来なかつたのであろうか。

この会が男性だけの、所謂気楽なスタッグパーティであったならば許せるであらうが、大半の者が夫人同伴で参加している正式な会食会である。この百人を越すご夫人方の中には我々が現役時代、各幕のトップ、各級最高指揮官、司令官等の夫人として、内外の豪華なパーティに

出席した経験をお持ちの方も多くおられた。このことからしても、パーティが、この程度のものかと思われることが、何としても恥ずかしく情けない。これを要するに、準備をされた方と我々の間の、この行事に対する思い入れの温度差にあると思う。

私は懇親会食は同窓会にまかせることなく、各期生会が主導で行うことがよいと思う。

即ち該当期は、その年の同期生会を、一生に一度、母校で行うと考えれば、会費を支払うことも当然であろうし、自分達なりの満足のいく会が開けるであろう。

やや次元の低い話になってしまったが、今後伝統行事として根付かせて行くための、一つの意見としてとらえていただきたい。第一回の行事として、同窓会の役員の方々は暗中模索しながら、良く準備して下さったと感謝している。これからは該当期の役員とよく細部調整され、この行事をより良い方向に発展させて行かれることを、切に願って止まない。

ホーム・カミング・
デーの実施

9期 日高 久萬男

本年3月19日、防衛大学校本科第44期生、理工学研究科第37期生及び総合安全保障研究科第2期生の卒業式に合わせ、本科第1期生のホーム・カミング・デー（HCD）が行われました。

HCDは、卒業後の適切な時期に想いでの小原台を訪ね、母校の卒業式典に陪列し、新たな卒業生の前途を祝福・応援すると共に現在の大学校諸施設を見学しつつ、現役学生、指導官及び教授等との相互の交流を通して同窓会と母校との絆を強化する、また、併せて、同期生とその家族の健康を祝い相互親睦を図る趣旨で計画されたものです。このHCDは、元々、平成11年3月10日、同窓会総会で戴いた当時の松本学校長の講演の中で同窓会へ提案されたものです。

この実行にあたって、当初、入校式（4月）、開校祭（11月）卒業式（3月）及び別途設けた時期の数案が在りましたが、松本前校長の積極的な御支援と御理解を得

て、区切りとして意義在る世紀末の平成12年の卒業式時、概ね65歳に到達する第1期生から始まりました。以降、期の順番で原則として毎年実施するものです。

HCDの主要な内容は、前述の趣旨に則り、卒業式陪列、観閲式陪列、校内研修及び懇親会です。ご承知の通り、卒業式は官邸、内局はもとより、在日外国大使館或いは米軍関係、そして卒業生家族と大勢の来校者で大学校当局は、その応対に暇なき状況ですが、防衛学教育学群長を頭とする同窓会小原台事務局の各員がHCDの計画、実行にあたってくれました。

第1期生の参加者は全国から133名で、令夫人83名と9名のお子たちを入れ合計225名が1日、舞台上で懇親を深められました。中には、部活、所属学生班或いは小隊で数日前から集合し、HCD予行を催された方々もありました。後日、参加者から大きな評価を得ましたが、その評価の大部分は、小原台事務局の積極的行動に負っています。尚、同窓会としては、参加者の午餐会経費支援の名目で所要の予算補助と参加記念品を準備させて頂いています。次回のHCDの順番である第2期生にあつては、年度当初から期生会役員を中心に準備を進められています。読者各位の順番をお待ち下さい。